

二〇二五年度

中等部入学試験問題

国語(60分間)

【注意】

- 1 問題は、一から三までです。
- 2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受 験 番 号				

氏 名

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合上、本文を一部省略した。

愛は中学受験を経て明星女学院^{めいようじょがく}に入学するが、中学二年生で転校することになった。以下は愛が転校先で出会ったクラスメイトの優希と誠に身の上話をしながら、過去を振り返っている場面である。

明星女学院はミッシヨンスクールで、屋外にはチャペルの前に広々とした芝生^{しばふ}のスペースがある。今日は天気も良く、開放感があつて、とても気持ちよさそうだった。

愛は、そこでお弁当を食べたいと思っていた。

「ね、せっかくだから、芝生のところで食べない?」

愛は思い切つて提案してみた。

机を動かしていた子が手を止めて、戸惑い^{とまど}を見せた。

「最初から外つていうのもね。休み時間、意外と短い。それに、一年生がいきなりつていうのも、どうかな」

「だよ。ひよつとしたら高校生たち? 先輩^{せんぱい}たちが芝生は占領^{せんりょう}するつていうルールが、あるかも知れないし」

そんなルールあるのだろうか、と愛は疑問に思った。そのとき、

——協調性がない

小学校のS先生の言葉が、S先生の声音^{こゑ}のままで、よみがえつてきた。

「そうだね」

気付けば、合わせていた。

「もうひとり、ほしいよね」

マーヤがつぶやくと、

「あ、わたし、あの子誘^{さそ}つてくる」

机を動かしていた子が、教室の入り口の方に向かって、ダッシュしていった。そこには、どうしたものかと所在^{ざい}なげに、目をおどおどと動かししている生徒がいた。

愛は教室をあらためて見わたして、やっと気付いた。

今、まさに、クラスのグループ分けが、確立^{かくりつ}されようとしているのだ。

ここで机を合わせてお弁当を食べるのが、その第一歩なのだろう。

そんな大事なときに、うっかり外なんかに出かけてしまったら、これまた大事な、他のグループの観察^{くさつ}ができなくなってしまうのだ。

愛は、このことに違和感^{いわかん}を覚えたが、それよりも、自分もグループに入ることが出来たという、とてつもない安堵感^{あんどかん}の方が勝^{まさ}っていた。

小学校のときみたいに「協調性のない」自分になってはいけない。

あの孤独^{こど}を二度と味わいたくはない。

今度こそ、失敗したくない。

唐突^{ちやうとつ}に、そんな思いがこみ上げた瞬間^{しゆんかん}だった。

「楽になれる」はずの、²中学生生活はちつとも楽ではなかった。小学校のときとはまた別の苦しみがあった。

自分を出せば、きつと浮^ういてしまう。マーヤたちのグループにいるためには、みんなに合わせなくてはいけない。

そのことは予想以上に、神経^{しよく}を消耗^{しょうもう}させた。

夏休みが目前のある日、数学の授業で、D先生が応用問題を出した。

「これは、はつきりいつて高校数学。でも君たちの優れた頭脳なら、出来るかも知れないな。さあ、分かる人」

D先生は、数学を愛してはいても、子どもに教えることへの情熱^{じやうねつ}に関しては、少しビントがずれていた。難しい問題を出しては生徒を試して、喜んでいるように見えた。

愛には答えが分かった。解けたことで、血が勝手に騒^{さわ}ぎ出した。胸が高鳴る。

手を挙げたい衝動にかられたが、こぶしを握ってグッとこらえた。

目立ってはいけないのだ。

すると先生が、

「米倉、どうだ？」

目が合ったわけでもないのに、いきなり振ってきた。首を横に振れば良かったのに、答えをつぶやいていた。

「ビンゴ」

D先生は嬉しそうに、上体を左右に揺らした。

「さすがは、米倉だなー。米倉は入試の算数、満点だったもんなー。まさに、逸材」

クラスでどよめきが起った。

明星女学院の入試問題の算数は、かなりの難問が出るのが定評で、半分得点できればいいという噂もある。

だからこそ、愛にとっては国語の記述の点数が取れなくても、断然有利に働いたのだ。

D先生の言葉に、愛は絶句した。

どうして、そんなことを、みんなの前で喋るのだろう。

愛は目を伏せた。それを、はにかみや謙遜とでも捉えたのか、D先生はますます調子にのった。

「うちの入試問題で、満点をとる生徒は、滅多に出ないんだよ。女子は数学が苦手だっていうからね。失礼、これはセクハラでした」

D先生は自分の後頭部を、ぱつこんと手のひらでたたいた。教室はしらけきり、ウケをねらったらしいD先生は、^aバツが悪くなったのか、話を戻した。

「米倉、面白い話そうと思っていたんだが、是非、日本ジュニア数学オリンピックに挑戦してみないか。先生は全面的にサポートするよ」

愛は顔を上げた。

日本ジュニア数学オリンピック？ ^b数学で闘うってこと？ ^cすごく面白そう！

一気に血流が上がった。でもすぐに、自分で自分に冷水を浴びせた。

そんな目立つことをしたら、マーヤたちとの関係が、おかしくなったりはしないだろうか。そう考えることすら、不遜なのだろうか。

愛は机の角をじつとにらんだ。

自分の才能を恨んだ。

普通でいいのに。普通がいいのに。

マーヤたちからは羨望の目で見られるようになった。対等に見えた関係が、グループの中でなんとなく、ちやほやされるような立ち位置に変わった。

嫉妬心も隠されていたかも知れない。明星女学院の生徒ならば、小学校のときには勉強で、断トツでトップクラスにいただろう。でも、トップばかりが集まってくる学校に入ると、やはりそのなかでのヒエラルキーが生まれてしまう。

プライドの高さが足かせになることで、^Aことは、余計に酷だ。もし一ランク落とした学校に行っていれば、

今でもトップでいられただろうに。愛が、そんな彼女たちから妬まれたとしても、不思議ではない。

出過ぎないようにという注意が、いつそう必要になった。

D先生は、さすがに教室で言うことはなくても、廊下などで会うと、しつこく「日本ジュニア数学オリンピック」のことを勧めてきた。

隣にマーヤたちがいても、お構いなくだ。

「興味ありません」

愛がそつげなく目をそらせると、

「もったいない。実にもったいない。その才能、先生がほしくらいだ」

D先生は悔しそうに、下唇を突き出した。

目立つことをしてはいけないのだ。それは「協調性」を乱すことなのだ。

神経にかけるやすりが、ピッチをあげた。

あるときから、数学の授業の前になるとお腹が痛くなり、保健室に行くようになった。しばらくすると、数学の授業のある日には、朝お腹が痛くなり、学校を休むようになった。そしてとうとう、冬休みを待たずして、愛は不登校になった。

優希は愛の話を聞いているあいだ、ときおり涙^{なみだ}が出そうになった。でも、愛の話を邪魔^{じゃま}したくないし、自分が泣くのは違う^{ちがう}。

ただまっすぐ川の流れを見つめ、心をなだめ落ち着かせ、じっと聞き入った。

自らの探究心や意欲を、根こそぎ折られた小学生のころ――。

周りに迎合^{*げいこう}しなければと必死になり、神経をすり減らした明星女学院のころ――。

際^{*}だった才能を持ったギフテッドだったがゆえに、愛が余計に背負ってきた孤独感を思うと、胸が締めつけられる。

愛は一度深呼吸をすると、続けた。

「みんな違ってみんないい、はずなのにね。学校って校則みたいに目に見えるルールよりも、同調圧力みたいに目に見えないルールの方が、意外とやかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が区切りながら復唱した。優希が大きくうなずく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなのに、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。

「こう言ったら、あの人になんて思われるかとか、嫌^きわれないかとか心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。本当は、三十五通りの心があるはずなのに」

愛の言葉は、優希の痛いところをぶすりと突いた。

人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を、見透^みかされているみたいだった。

「同調圧力があつたとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃんと言うことが大切なんだね」

優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含^みめた。

「透明なルールってさ」

「透明な、ルール？」

愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中をすつと切り開いた。何かをつかめそうな予感がある。

「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確かにあるんだけど……」

愛はそこで切って、考えるように首を傾^{かたむ}けた。

あるんだけど……？

優希はじつと、その続きを待った。

「透明なルールって、**B**、って今になって思うんだ」

「どういうこと？」

思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離^{はな}す。

「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックを勧められたとき、目立ちたくないから、わたしは頑^{かた}なに断ったでしょ」

「うん」

「でもあれって、**C** のかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛^{しば}っていたんじゃないかって」

「ごめん、よく分からない」

「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、マーマたちはひょっとして、いっしょに喜んでくれたり、応援^{おうえん}してくれたりしたんじゃないかって」

「それはありだよ」

誠が相づちを打った。

「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛られていただけかも」

——自分が自分に作ってしまう、透明なルール

5

気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。

(佐藤いつ子『透明なルール』)

* 逸材…優れた才能を持つ人のこと。

* 謙遜…ひかえめなつましい態度のこと。

* 羨望…うらやましく思うこと。

* ヒエラルキー…階層。

* 迎合…気に入られるよう相手に合わせること。

* ギフテッド…先天的に高い能力を持つ人のこと。

問1 ——線a「バツが悪くなった」、b「自分で自分に冷水を浴びせた」の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a「バツが悪くなった」

ア 手ごたえがなかった

イ 悔しくなった

ウ 落とし所がなかった

エ 寂然としなかった

オ 気まづくなった

b「自分で自分に冷水を浴びせた」

ア 自分で自分の氣勢をそいだ

イ 自分で自分の過ちを正した

ウ 自分で自分の気持ちを確認した

エ 自分で自分の未練を断ち切った

オ 自分で自分の怒りを鎮めた

問2 ——線1「違和感」とあるが、「愛」はどのような状況に「違和感」を覚えたのか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

しいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 芝生を高校生に占領されてしまい、芝生に行きたいという自らの欲求をおさえない状況。

イ クラス内での人間関係を、何よりも優先しなければならぬという強迫観念にかられている状況。

ウ 自分の意見を持っていたはずなのに、気付けばグループのみんなに話を合わせてしまっている状況。

エ あるかどうか分からない年功序列の考え方が、グループ内で当然のものとして蔓延している状況。

オ グループに入って安堵できるはずなのに、それでも仲間外れにされてしまう恐怖が頭から離れない状況。

問3 ——線2「中学生生活はちっとも楽ではなかった」とあるが、その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

び、記号で答えなさい。

ア 難しい応用問題などが授業に出てくる頻度が高く、小学校の授業との違いに中々慣れなかったから。

イ 念願がかないグループに入れたが、しばらくしてグループのメンバーと気が合わないことに気が付いたから。

ウ 周りを顧みずにクラスの中で自分の好き勝手に行動した結果、仲間外れにされてしまったから。

エ 他人のやりたいことに付き合った結果時間がなくなり、自分の好きなものから離れざるを得なかったから。

オ 再び孤独になることを恐れるあまり自分の気持ちをおさえつけ、神経をすり減らすことになったから。

問4 — 線3「絶句した」とあるが、このときの「愛」について説明したものとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア D先生の発言がきっかけで、マーヤたちとの関係性が壊れてしまうのではないかと心配になった。
イ クラス内で目立たないようにしてきたのにもかかわらず、D先生がその努力を台無しにしたことに憤りを覚えた。
ウ 思いもよらない話でクラス中から注目されるはめになってしまい、いきなりの出来事に戸惑いを覚えた。
エ 自分の才能を知られないようにと気を付けていた中で、思わず問題に答えてしまった自らのうかつさを呪った。
オ D先生が生徒のことをあまりにも理解していないことが分かってしまい、呆れてもの言えなくなった。

問5 — 線4「そう考えることすら、不遜なのだろうか」とあるが、この部分の言いかえとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の能力が原因で友人関係が壊れるのではないかと危惧すること自体が、自分の能力を過信していることになってしまふのだろうか。
イ 自分が周りに合わせなければグループ内の関係性が崩れてしまふと危ぶむこと自体が、マーヤたちとの友情を疑うことになるのだろうか。
ウ D先生が自分だけに特別な話をしてくれたという事実があるのに、自分に優れた才能があると思うのはいけないことなのだろうか。
エ 日本ジュニア数学オリンピックに出ることで自分の能力をひけらかしてしまつたら、クラスメイトたちから妬まれてしまふのだろうか。
オ 日本ジュニア数学オリンピックに出場することを聞いただけでおさえられなくなつてしまふ好奇心が、周りとの溝を深める原因なのだろうか。

問6

A

に入る表現として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア トップを目指す
イ トップでいられる
ウ トップでいつづける
エ トップではなくなる
オ トップでも満たされなくなる

問7

B

C

に入る表現として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

B

ア 同調圧力じゃない

イ 同調圧力ですらない

ウ 同調圧力だけじゃない

エ 目に見えないわけじゃない

オ 目に見えないものだけじゃない

C

ア みんなの反応を無視できた

イ みんなの反応を読み違えていた

ウ みんなの反応を勝手に決めつけていた

エ みんなの反応を重く受け止めすぎていた

オ みんなの反応を参考にするべきじゃなかった

問 8

——線 5 「気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた」とあるが、「透明なルール」に関する「愛」の話から「優希」はどのような気付きを得たと考えられるか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 他人の反応を常に自分の中で考えていたが、実際に口に出して相手に確認しなければその考えが正しいかどうかは分からないという気付き。

イ 他人との相互理解が難しいのは人の考え方が多岐にわたるうえに、お互いが遠慮して相手に本音を伝えられないためだという気付き。

ウ 他人のことを理解できていると思っていたが、実際は自分が見たい相手の一面のみを見て相手を理解しているつもりになっていたのだという気付き。

エ 他人の目を必要以上に意識して不安を感じていたが、実はその目が現実には存在せず自分の想像の中で作り上げられたものでしかないという気付き。

オ 他人に自分の主観を押しつけるような話ばかりをしてしまうと、相手との関係は歪なものになり疲弊してしまうのだという気付き。

二次の文章A・Bは二人の作家による往復書簡（手紙のやり取り）である。これを読んで、後の問いに答えなさい。解答の際は句読点等の記号も一字として数える。なお設問の都合上、本文を一部省略した。

A 植本一子から、滝口悠生への手紙

子を持つ友人と先日、子どもがレベルの低い高校へ行きたいと言い出したらどうするか、という話になりました。レベルが低いというのは、その子の学力ならもっと上を狙えるのに、その高校に本人のやりたい部活がある、ということ想定しているそうです。それはもったいない気もする、悩むねえ、と友人と話していたのですが、私は「娘がやりたいことがあるならそこでもいいかな」と答えていました。友人は、そんな一時の子どもの感情で進路を決められても、と言っていました。中3なら、すでに一時の感情ではないと思うのです。自分がまさにそうで、行きたい高校に行けないなら、行けるところで出来ることをしよう、と決めたのもその時でした。まあそれは私の場合なので、その年頃の子が全員そうではないと思いますが、私は娘の選択を信じる、と思いました。どんな相手であれ、その人を信じるって、本当に覚悟のいることです。同時に、彼女が決めたことの責任を、彼女自身が背負うことになると思うと、傷つく姿を見たくない、と別の道を勧めたくなる気持ちもわかります。ついつい先回りして、彼女が傷つく権利さえも奪ってしまいうそになります。これから先は離れていく一方で、もはや赤ちゃんの時代をとくに過ぎた彼女を、昔のようにつきつきりで守ってやることはできません。ただ見守ることと、安心して帰ってこられる場所を作ることしか、私にはできないのだと思います。

B 滝口悠生から、植本一子への手紙

保育園で一、二歳年上の子を見るだけで娘の先行きが途方もないように思ってしまうので、娘が中学生になる頃のこととはまだ全然想像ができません。でも子どもを育てる環境とか方針とかについては自然とあれこれ考えたり夫婦で話をする機会があります。

東京という場所がどうなのか、そもそも日本という国がどうなのか。もちろん現実的な制約もあって、いまのところ日本の東京以外の場所でも子どもを育てる選択肢はすぐには考えにくいのですが、でも都内でも出産とか保育園の申込みとかに際して区によっていろいろ違いがあったりして、そういう条件の違いによって生じる可能性の差、みたいなことはことあるごとに気にかかります。すると選択可能なもののうちどれが最善かみたいな思考回路にどうしてもなりがちなのですが、それにとっても疲弊してしまいます。

あまり自覚していなかったのですが、僕はできるだけそういう考え方で物事を判断したり決定したりしたくないと思って生きているようで、それはいろんな条件が重なり合い、いろんな事態が到来するなかで現状を肯定できるものにしていくため各方面に対応する、みたいな人生観がどうやら僕にはあるからで、事前の判断による良し悪しとか損得はあてにならないと思っているからだと思っています。

事前に判断可能な最善とか損得って誰にとってもある程度当てはまるようなことだから、少しでも安心したいとか、少しでも得をとろうとするひとがそこに殺到する、そんな構図が心底嫌いで、受験勉強とかまさにそういうものだから、本当にいやでした。

大人になって自分の生活や人生のことを自分の好きな考え方で決められるようになったのはとても快適なことですが、でも、自分に子どもができてみると、子どもの生活や人生のことを自分の生活や人生と同じように考えるわけにはいかず、そうすると自分の人生から遠ざけていたはずの、できるだけ安心で、損をしないような選択はどれか、という思考回路にしばしば陥ってしまいます。²そして疲れます。

（中略）

ところで僕は三歳の頃から絵を習っていました。最初の頃は記憶もないので、絵を描くのが好きそうだから、と親が通わせてくれたそうです。途中結構さばったりもして、絵はたいしてうまくならなかったのだけれど、結局高校のときにその絵画教室が閉まるまで通い続けました。十五年くらい。

彫刻家の先生が副業でやっていた教室だったのですが、先生が本業でつくっている作品はでかい鉄の彫刻で、何トン

とかある鉄の塊をハンマーで叩いて「無題」、みたいなごりごりの現代美術でした。そういうなんか浮世離れた大人が身近にいたことは、特に十代以降のあれこれ屈託していた自分にとって、いま思うと結構大事な拠り所になっていたように思います。辞めずに通い続けたのも、絵を描くことよりその先生のところに顔を出す、という動機が大きかったように思います。

学校とか家とか、思い通りにいかない、納得がいけないことがたくさんあって、でもそこだけが世界じゃなくて鉄の塊叩いて無題みたいな場所も世界にはあると思えば、どうしようもなくなればどこかにひとつふたつ逃げ場所があるだろう、と思えていたのではないのでしょうか。

子どもの学校とか、教育を受ける環境とか、具体的にはまだうまく想像できないけれど、いつか子どもが大きくなつて、目の前の世界に絶望しそうになったときに、目の前に見える世界だけが世界じゃないから大丈夫、と伝えてあげたいということだけはなんとなく思うようになりました。あとは、なにかやりたいことがありそうなときに、それを決してくじかず、必要そうなら背中を押してあげること。

(植本一子・滝口悠生『ひとりになること 花をおくるよ』による)

* 「無題」……ここでは彫刻作品のタイトルをあらわしている。

* 現代美術：美術史上の考え方で、二十世紀以降の美術を指すことが多い。

* 屈託……心配すること。くよくよすること。

* 拠り所……頼みとするところ。支えてくれるもの。

問1 — 線1「彼女が傷つく権利さえも奪ってしまいそうになります」とあるが、文章Aの筆者はここで何を問題にしていると考えられるか。解答らんに合わせて二十字以内で説明しなさい。

二十字以内

を奪ってしまうこと。

問2 — 線2「そして疲れます」とあるが、文章Bの筆者は何に「疲れ」を感じているのか。解答らんに合わせて二十字以内で説明しなさい。

二十字以内

から抜け出せなくなることに「疲れ」を感じている。

問3 — 線3「いま思うと結構大事な拠り所になっていたように思います」とあるが、文章Bの筆者がこのように言うのはなぜか。解答らんに合わせて三十字以内で説明しなさい。

彫刻家の先生のおかげで、

三十字以内

と考えることができたから。

問4 文章A・Bについて、「共通する考え」と「対照的な考え」を次のように説明した。それぞれの解答らんに入る言葉を指定された字数で考えて、説明文を完成させなさい。ただし、①には「おとな」、②には「子ども」、③には「価値観」という言葉を必ず用いること。

「共通する考え」

① 十五字以内

するのではなく、

② 十五字以内

と、どちらの筆者も考えている。

「対照的な考え」

文章Aの筆者は、安心して帰ってこられる場所を作っているように、こどもにとって慣れ親しんだ世界を築いてあげることが自分の役割だと考えている。

一方、文章Bの筆者は、

③ 三十字以内

ことが自分の役割だと考えている。

三 次の問いに答えなさい。

問1

①～⑧の文中にある——線のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。ただし、カタカナに送りがなが含まれるものは送りがなをひらがなで答えること。

- ① 暑さで水分がジヨウハツする。
- ② 前もって、メンミツな計画を立てる。
- ③ キコウ文を書き、旅の思い出を記録に残す。
- ④ いつか、太平洋をコウカイするのが夢だ。
- ⑤ この薬は、のどの痛みによくキク。
- ⑥ ヤサシイ問題はかりが出るとは限らない。
- ⑦ 机の上に、ムゾウサに置かれた本。
- ⑧ 日々努力を重ねた結果、学業が成就した。

問2

次の **A** ～ **G** に漢字一字を入れると、慣用句を用いた文になる。

A ～ **G** の中で、同じ漢字が入るものを選び、記号で答えなさい。

・長年の研究が **A** を結んだ。

・何事にもこだわらない、 **B** を割ったような性格の人。

・私は将来、弁護士として **C** を立てるつもりだ。

・破 **D** の勢いで勝ち進む。

・ **E** が熟すのを待って行動する。

・ **F** が置けない友人と旅行を楽しむ。

・この道に進もうと **G** をくくった。

〔以下 余白〕